

R7年の防除の考え方（R7年1月14日完成）

1. R6年の病害発生状況

芽焼け：ほぼ抑制できた。Ca剤を散布したためと思われる。

芯喰い：盆咲はほぼ皆無、彼岸咲は少し、10月咲は大きな被害だった。

ハダニ：8月25日に彼岸咲に被害を確認。彼岸咲と10月咲が大きな被害を受けた。

白さび：発生なし

アブラムシ：散発で制御できた。

2. 防除プログラムの作成手順

- 基本的な防除方法を決めてから主要病害虫ごとの散布方法と使用する薬剤を選定する。
- 散布日ごとに主要病害虫ごとの薬剤群から薬剤を順番に選定する。
- 散布日ごとと作付け群（咲季）ごとの散布水量を実績値を参考に設定する。

3. 基本的な防除方法

防除期間：定食後5週令時～17週令時、5日または10日間隔で防除する。

動噴設定：ホース圧力損を考慮しポンプを2MPa、散布水量は200～250ℓ/10aを目標

散布方法：①全体散布と頂部散布に分け5日間隔で交互に実施

②頂部散布は、カメムシ、ヨトウ・タバコガ用薬剤を頂部に散布

③他（白さび、ハダニ、芽焼け）は、カメムシ、ヨトウ・タバコガ用薬剤と共に全体に散布

④彼岸咲（坊田圃）と10月咲（坊田圃）は同時に同薬剤を同じ方法で散布

⑤盆咲（杉本圃）と坊田圃は異なる薬剤構成も可とする。

少量の残薬剤：混合して散布し消費する。

ステンレス(50ml)、テデオン(30ml)、アーデント(50g)、アディオン(100ml)、デルフィン(80g)、マッチ(50ml)、ピリカット(20ml)

4. 主要病害虫ごとの薬剤群

a. 白サビ病

発生期の5月～7月18日と8月27日以降に10日間隔で散布する。発生が少ない7月下旬～8月中旬は散布しない。使用する農薬は、「キク白さび病に対する各種殺菌剤の予防効果」（奈良農研ニュース Vol.162、2022）を参考に選定した。

アンビル、オペラ（残量 150ml）、カナメ、ダコニール（リスクが低い時）、チルト、ハチハチ、メジャーFL、ラリー（補助的使用）
--

b. ハダニ

①6月末までは安価なイオウフロアブルを10日間隔で散布

②7月以降は下表の薬剤を使用し、フーモンを補完的に使用

薬剤名	殺卵	殺虫	残効	速効	回数	単価	その他
カネマイト FL	◎	◎	長	速	1	11	各ステージに効果
コロマイト乳剤	○	◎	中	速	2	10	新規購入しない。
サンマイト FL	◎	◎	長	速	2	14	劇物、使用しない。
スターマイト FL	◎	◎	中	速	1	10	アルカリ混用不可
ダニオーテ FL	◎	◎	長	速	2	12	全ステージに有効
ダニサラバ FL	◎	◎	長	速	2	11	
ダニトロン FL	◎	◎	長	速	1	9	
バロック FL	◎	×	長	遅	1	20	新規購入しない。
マイトコーネ FL	△	◎	中	速	1	10	新規購入しない。

③盆咲は、7月18日に抗ダニ剤、10日後にフーモンを散布

④彼岸咲と10月咲は、8月7日（彼岸咲83日齢、10月咲56日齢）にバロック FL、その10日後にフーモン、以後は10日間隔でダニトロン、ダニサラバ、ダニオーテ、カネマイト、スターマイトを散布、フーモンも補完的に使用する。 → 詳しくは散布計画表

c. 芯喰い虫対策

30～120日齢の期間、5日間隔の頂部または全体散布で次の薬剤を散布する。ただし、100～120日齢の散布は、開花（出荷）状況を勘案して決める。

カメムシ対策	ヨトウ・タバコガ対策
アルバリシ、スミチオン、ダントツ、トクチオン、トランスフォーム、トレボン、ベストガード	カウンター、グレース、コテツ、トルネードエース DF、ファイントリム DF、プレオ、プロフレア SC、ロムダン

d. アブラムシ対策

a～cに抗アブラムシ成分がない場合は以下の薬剤を使用する。

コルト、モスピラン

e. 芽焼け対策

5週令～15週令前後の間、10日間隔でCa剤（カルセブン）を全体散布する。

（以上）

令和7年 小菊の防除計画

↓網掛けは菊体全部への散布

[illegible]

○数値は、該当する病虫害に効果ある薬剤の数を示す。